



●砂に埋もれて口だけ出して —イワカワゴロモガイ—

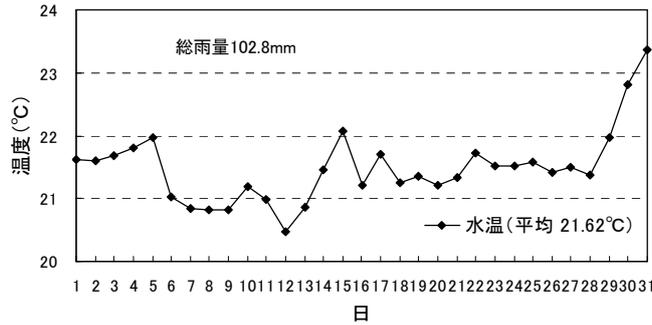
阿嘉島は、岩礁^{がんしょう}や転石^{てんせき}、砂浜などいろいろなタイプの海岸で取りまかれています。そして、それぞれの海岸には、そこに適した生物がすんでいて、島周辺の海に数多くの動植物種が見られる理由のひとつとなっています。みなさんの中には、岩礁でサンゴなどたくさんの生物がひしめくようにすんでいるのに比べると、砂浜はずいぶん生物が少ないように感じている人がいるかもしれませんが、必ずしもそうとは限りません。特に浅くて海草の生えている砂浜には、実にさまざまな生物がくらしています。今回は、そうした生物のひとつを紹介しましょう。

前回のアムスルだより (No.84) でオヨギイソギンチャクを紹介しましたが、これも海草のはえているところで見つかる生物のひとつで、阿嘉島でも数年前にクシバルで見つけたことがありました。た

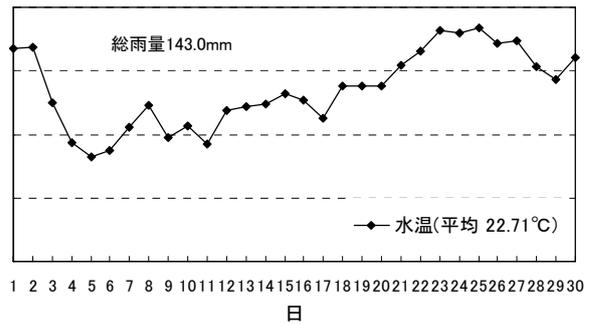
だし、今クシバルでは海草はずいぶん減ってしまいました。同じように、ヒズシの海草も今ではずいぶん少なくなっていますが、マエノハマでは逆にかなり増えているようです。きちんとした調査を行なったわけではないのですが、今、浜の東側には10年前にはなかった海草の群落が広がっています(「海草」となにげなく書いてきましたが、これは「海藻」とは違い陸上の植物と同じように根・茎・葉の区別のある花をつける水中植物のグループです:アムスルだより No.39 で紹介しました)。この前その場所で泳いでみると、リュウキュウマガモやウミジグサという海草の葉の上にはヒドロ虫やヨコエビ、そしてやはりオヨギイソギンチャクなどがすんでおり、葉の間をぬうようにベラの稚魚^{ちぎよ}など小魚が泳ぎ回っていて、葉のかげにかくれるようにヨウジウオが寝そべっているのも見かけました。そして見つけたのが上の写真の生き物です。長さは9cmくらいで、よく見ると海草のすき間の砂底にたくさんいます。ちょっとさわってみると口が閉じてしまうので、どうやら貝のようです。じっくり見てみるために砂から取り出そうと引っ張ってみましたが、ぜんぜん出てきません。思ったよりもしっかり埋まっているようです。ますます興味がわいてきてスコップで掘り出すことにしました。そうして表に取り出したのが、

定点観測

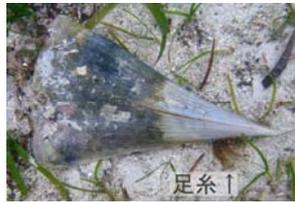
2007年 3月



2007年 4月



下の写真です。口から反対のところが先までの長さは14cmほどあり、しかも体から出したたくさんの茶色い糸（足糸）を石などにくっつけて体を固定できるようになっていて、どうりで簡単にはひっぱり出せないわけです。



研究所でさっそ

く調べてみると、殻の形と表面の様子から、どうやら「イワカワゴロモガイ」という二枚貝のようです。近い仲間にはタイラギやハボウキガイがいて、どれもとがった先端を砂地に埋もれさせてくらししている貝です。きっと、そのくらし方に適した形に変化してきたグループなのでしょう。タイラギやハボウキガイは、それでも砂地につき立っているくらいの埋もれ方なのですが、イワカワゴロモガイは体のほとんどが砂の中で、ちょっと見ただけでは、見過ごしてしまうほどです。

二枚貝の多くは、海中を漂っているプランクトンや小さなごみ粒を取り込んで餌にします。イワカワゴロモガイもその例にもれず、そうしたものを食べています。イワカワゴロモガイが、海草の群落の中に数多く生息していることを考えると、そこにすんでいるたくさんの小さな生物によって餌となる粒子がたくさんでき、また海草の葉によって水のながれがゆるやかになるため、こうした餌がたっ

くさん集まりやすくなっているのかもしれない。

イワカワゴロモガイの仲間のタイラギのことは、知っている人もいるかもしれませんが、瀬戸内海や有明海でよく獲れ、貝柱をさしみやすしネタとして食用にする、大変おいしい貝です。そして、ハボウキガイも、数が少ないのであまり一般的ではないですが、獲れる場所では食用にされているそうです。そうなると、イワカワゴロモガイにも期待したいところですが、ある研究報告ではその外套膜から毒が検出されたらしく、はっきりするまでは食べない方が良さそうです。

● 阿嘉島の海より

阿嘉の新港近くにサンゴの種苗センターがあるのはみなさんご存知だと思います。これは日本最南端の島、沖ノ鳥島のサンゴを増やすために水産庁がつくった施設です。

5月16日の早朝、沖ノ鳥島に行っていた調査船が阿嘉島に到着しました。船には沖ノ鳥島で採集したサンゴが積まれています。これらのサンゴは、サンゴセンターの水槽に運ばれ、やがて産卵します。そうして生まれた新たなサンゴを一年間阿嘉島で育て、再び沖ノ鳥島に戻すのです。

